令和8年度 第51回「北の住まい」住宅設計コンペ
入 賞 作 品 展

「北の住まい」住宅設計コンペ」は、当協会の前身である「社団法人北海道建築設計監理協会」の主催で、昭和44年（1969年）8月に「北国の住まい住宅設計コンペ」としてスタートし、今回で51回目の開催となりました。

今回の課題は、「かわいいイエ」です。74作品が応募されました。

設計競技審査委員会において行われた二次審査と公開で行われた最終審査では、米田委員長をはじめとする構成メンバーによって多様な意見と評価・感想が交わされ、慎重かつ闊達な議論の交換が行われました。その後数回の投票の結果、つぎの皆様が受賞されました。

入賞作品のほか委員長による総評、委員による各作品の講評を掲載しておりますので、ご覧ください。

■主催 （一社）北海道建築士事務所協会

（後援） 北海道、（一財）北海道建築指導センター、（一社）北海道建築士会、
（公社）日本建築家協会北海道支部、（一社）日本建築学会北海道支部、㈱北海道建設新聞社

【設計競技審査委員会：構成メンバー】（委員は五十音順）

委員長	米田 浩志	北海学園大学工学部建築学科 教授
委 員	赤坂 真一郎	㈱アカサカシンイチロウアトリエ 代表取締役
委 員	岩澤 浩一	北海道科学大学工学部建築学科 教授
委 員	小澤 丈夫	北海道大学大学院工学研究院 特任教授・名誉教授
委 員	小西 彦仁	ヒココニシアーキテクチュア㈱ 代表取締役
委 員	澤田 貞和	㈱日本工房 取締役会長
委 員	松田 眞人	㈱都市設計研究所 取締役会長

【課題】

「かわいいイエ」

「かわいい」とは、もともとは、「かわゆし：気の毒で見ていられない」という意味だったのが、「小さくて愛らしい」に変化したと言われています。

近年、建築費が高騰し、大きくて豪華な家が建ちにくくなっています。

また、最近の若い世代の住宅に対する希望では、「安全・快適」より「精神的な安定を得られる落ち着ける場所」が上位にランクされているようです。一方で、限られた空間で落ち着きを求め、孤立化を招くのは好ましくないでしょう。

「かわいいイエ」であれば、そこに住む人が落ちつける場でありながらも、周囲から親しみを感じられ、人々とのコミュニティをつくるきっかけになるかもしれません。

あなたにとっての「かわいいイエ」はどんなカタチをしていますか？

【賞金】

最優秀賞	25万円	（1点）
優秀賞	5万円	（2点）
奨励賞	2万円	（4点）

【審査経過】

一次審査	9/25（金）～9/30(水)	24作品を選出
二次審査	10月23日（金）11：00～	一次審査通過作品から10作品を選出（入選）
最終審査	10月23日（金）14：00～	二次審査通過作品から各賞計7作品を決定

【受賞作品及び受賞者】

最優秀賞作品1点、優秀賞作品2点、奨励賞作品4点は、つぎのとおりです。

賞	作品名	作者	
最優秀賞	愉快な仲間と生きる家	田元　良	武部建設株式会社
優秀賞①	住まいを剪定する	海老子　陽	星槎道都大学　3年
優秀賞②	紡ぎ目	池野　芽久	星槎道都大学　3年
奨励賞①	クロス上の可笑しなイエ	共同作品　田中　篤史 塩野谷　基悟	北海学園大学　4年 Qukan 一級建築士事務所
奨励賞②	みつけてすまう	菊池　美優	北海道芸術デザイン専門学校 2年
奨励賞③	Peekaboo！House	佐藤　択音	北海学園大学大学院　2年
奨励賞④	- ふと、暮らしが見える -	佐々木　絢斗	星槎道都大学　3年

注）優秀賞以下の〇数字は賞の順位を示すものではありません。（受付順）

【入選 3 作品】（受付順）

入選①	そっと、ここまで。	共同作品	工藤　木乃華 新井　乃愛	北海道科学大学　4年 北海道科学大学　4年
入選②	影の咲く家		宮本　実久	北海道芸術デザイン専門学校　2年
入選③	こらーじゅ		濱名　琴音	北海道科学大学　3年

二次審査風景

令和8年10月23日（金）午前
於）設計会館8階A・B会議室







最終審査風景
（公開形式）

令和8年10月23日（金）午後
於）設計会館8階A会議室







第５１回　「北の住まい」住宅設計コンペ

総　　評

建築の魅力を表現する言葉には、美しい、豊かさ、あるいは心地よさなど様々な指標が存在している。一方、日常の生活風景に目を向けると、特徴的な現象や存在に対して、その魅力を「かわいい」と言う言葉で表現する機会が増えてきた。この「かわいい」が持つイメージを、小ささや不完全さといった言葉に置き換えることもできるが、それらだけでは捉えきれない感覚を含んでいる。そこには、対象に対する親しみや愛着、あるいは個人的な感情が介在し、肯定的なイメージを持ちながらも、受け手によって異なる解釈が生まれるという特徴がある。本課題では、この曖昧で多様な意味を持つ「かわいい」という感覚を、仮に住宅という建築のかたちに表現したとき、どのような空間や形態として現れるのだろうか、という問いから出発した。この問いかけに対して生み出された作品は、「かわいい」という感覚を建築としてどのように捉え、表現するのかという可能性を示すものであり、審査委員からも大きな関心が寄せられた。

今年は、９月 18 日に締め切られ、応募総数は 74 作品であった。課題に多様な解釈感もあって例年の応募数を大きく上まった。作品応募の締切り後、９月 25 日から 30 日の４日間の中で、各審査委員が第一次審査を行なった。この段階での審査は、審査委員が７票を持ち票として、１票でも投じた作品を通過作品とした。結果、24 作品が通過した。その後、10 月 23 日の午前中に第二次審査を行なった。それぞれの作品に対する評価の議論を重ねながら、投票を繰り返し、第一次審査通過 24 作品から入選 10 作品を選出した。当日の午後には、最終審査を公開で行った。改めて作品の特徴を再確認しながら、各審査委員の評価の視点を提示し、投票によって最優秀作品１点と、優秀作品２点、そして奨励賞作品４点を決定した。

最優秀賞作品である田元良案は、初期段階から高い評価を得ていた。シンプルな平面構成でありながら、建築の形式が生活者や自然現象と巧みに結びつけられている点が秀逸である。図面全体から建築の体感性を喚起する、優れた作品であった。住宅のミニマムなイメージが、独特の「かわいさ」を表現していた。優秀賞作品である海老子陽案は、半透明のメッシュスクリーンによって、生活の領域と周囲の環境を柔らかく結びつけていた。将来、植物が成長し、メッシュに絡みつくことで、建築と自然の境界が次第に曖昧になり、その輪郭は不確かなものへと変化していく。建築とも自然ともつかない、その曖昧で柔らかな風景こそが、本作品の「かわいさ」のイメージを生み出している。もう一つの優秀賞作品である池野芽久案は、優しいドローイングを通して描かれる、さまざまな生活のシーンが魅力的であった。そこに漂う空間や時間には穏やかな安心感があり、日々の暮らしのなかで生活への愛おしさが育まれていく様子が感じられる。何気ない生活の一瞬一瞬が、やがて「かわいさ」の余韻として心に残っていく。そうした情景を想像させる、豊かな感性に満ちた作品であった。そして、奨励賞作品それぞれ４点も上位の作品に劣らない特徴的な作品であった。

「かわいさ」を建築の魅力をとらえる指標として探求することは、古典的な指標に基づく建築の形式とは異なり、個々の感情や主観を建築的な形式へと昇華する機会ともなり得る。このような視点は、新たな共感を生み出すための方法論として有用であり、同時に、北海道におけるこれからの住まいのあり方を考える上で重要な可能性を秘めている。今回の課題は、このような創造的なスタンスの意義を再認識する機会となった。今後も、応募者の皆さんが北海道を舞台に活躍されるとともに、その活動を通じて新たな建築的成果が生み出されることを期待したい。

設計競技審査委員長　米　田　浩　志

【最優秀賞】

「作品名」 愉快な仲間と生きる家 「作者」 田元　良



＜講　評＞

「不完全でありながら、北国の環境を生き抜く健気な暮らしそのもの」が、“かわいいイエ”であると設計者は言う。音更町の住宅地に提案されたわずか 9 坪の小さな住宅に、考え方は見事に凝縮されている。構成はシンプルで、3 間 x3 間の正方形平面をもつ箱状の空間に、四方から径の異なる円形の庇空間を貫入させている。各々の庇空間には、リビングとテラス、キッチンと畑、浴室と水場、洗面・脱衣・クローゼットと物干しスペース、という屋内外の機能が組み合わされ、屋内と屋外が境界を曖昧にする領域を介して繋がれている。日本建築の伝統が有してきた庇空間の再解釈として興味深い。ここに住まう人は、庇下に目隠し用に積まれた石や半透明パネル、水面、植物、空から差し込む光、風や雪の移ろいに包まれた暮らしを営むことになる。小さな屋内空間では、こぢんまりとした家具や小物、風に揺らぐカーテン、洗濯済みの衣類など、暮らしを共にするあらゆるモノやコトが身近に置かれている。

設計者にとって、これら屋内外にあるすべてのモノやコトが、”愉快な仲間”であり、模型を駆使した丁寧なプレゼンテーションからは、日常生活への愛着と北国の暮らしに対する健気さがダイレクトに伝わってきた。確信的な共感を得た全審査員の総意によって選出された最優秀作品である。

設計競技審査委員会
委員　　小澤　丈夫

【優秀賞①】

「作品名」 住まいを剪定する　　「作者」海老子 陽



＜講　評＞

この作品は、住まいを、時間の経過と共に価値を低下させるものではなく、時間の経過とともに育むものであるべきと捉え、この媒体を住宅の周りの樹木としています。

家の外周部に、2重のエキスパンドメタルのスクリーンを設け、その間に樹木を植え、スクリーン間の歩廊から、樹木の生長や生活スタイルの変化に応じて、住人が樹木の剪定を行うという想定です。

樹木やスクリーンを含めた住まいに、時間の経過とともに手を加えることにより、家を、耐久消費財ではなく愛着のある「かわいい」存在とし、このコンペのテーマに真正面から応えた優れた作品となっています。更に、周辺のまちとの関係においても、昼夜や季節の変化により住宅の姿が形を変え、景観に奥行を与えそうです。そもそも、住宅を竣工した時点を終わりとするのではなく、そこを始まりとして捉え、デザイン処理された、仮設材としてのネットフェンスを住宅の構成要素に取り込もうとする大変ユニークな提案でもあります。一方では、この提案にはまだまだ、伸び代があります。この細い幅の2重スクリーンでは、樹木がはみ出して成長の邪魔になるので幅はもっと変化があっても良かったのではないか、そして、樹木だけではなく、家に対しても剪定(手をかけていく)行為があっても良かったのではないか、等の可能性を秘めた提案でもあります。そうすれば、最優秀はすぐそこにあります。目の付け所の良さが素晴らしいので、更なる飛躍を期待します。

設計競技審査委員会

委員　　松田　眞人

【優秀賞②】

「作品名」 紡 ぎ 目　　「作者」 池野　芽久



＜講　評＞

「紡ぎ目」と題した本提案は、定められた用途からはみ出した行為を「かわいさ」と捉え、内部空間やテラスが相互に重なり合うよう中央にカーブしたボリュームを挿入し、小さな段差や床の貫入によって異なる空間を紡ぎ、自由な振る舞いを誘発するよう計画されている。

紡ぎ目で交わされる住まい手の日常が丁寧に描かれ、設計者の思いが伝わってくる。

一方、各空間の高さや屋根の連なり、全体の佇まいなどについては、断面図や模型、鳥瞰パースなどを通して、建築的に示してほしかった。ゆとりを持った平面計画であるが、もう少し規模を絞り込んだ方が、はみ出した行為が混ざり合い、よりコンセプトを深化させた住まいになったのではないだろうか。

設計競技審査委員会

委員　　岩澤　浩一

【奨励賞①】

「作品名」 クロス上の可笑しなイエ　　「作者」田中　篤史／塩野谷　基悟



＜講　評＞

敷地は藻岩山の麓の視界が開ける角地。家を包み込む浮き上がった地面と、閉じつつ開いた四角い生活棟と円柱の設備棟を提案している。「かわいい」をお菓子箱に暮らしの場面を詰め込むさまに見ている。建築化された家には窓がなく、切れ込まれた開口部があるのみ。

具体的なモチーフはケーキとコーヒーカップ。ケーキ素材は生クリームで覆われたボリューム(生活棟)をもつ。コーヒーカップ(設備棟)は陶器素材が器となり黒い苦いコーヒーを想像させ暖かさを持つ。描かれた平面図と断面図からも、かわいい暮らしが伝わる。ところが模型写真の外観が、北海道の暮らしを包む素材としては貧弱に見える。

よく考え描かれているだけに、大事なところが伝わらず残念に思いました。

設計競技審査委員会

委員　　澤田　貞和

【奨励賞②】

「作品名」 みつけてすまう　　「作者」 菊池　美優



＜講　評＞

自然はせかいでいちばん最初の家というサブタイトルどおり、地球において人類よりは先に出現した植物の実や葉の空間利用に目をつけた作品である。人類も生物でありその進化の過程においては洞窟に長く住まい自然のつくりだす状態を利用して住まいとしていた、人が家をつくりだすのは1～2万年前のことであり地球史上においては最近のことである。

その史上で植物の実や葉や茎自体の形態はすでに地球環境に順応した様々なカタチを生みだしていて空間性に富んでいるものが多く、この計画もそこに着目して「かわいい」住居を考えたものである。15の住居パターンを巧妙に創り出した秀作であるには違いないが、ただ住居構成が植物内部の自然構成とは別に水平な床や生活道具が押し込められているものも多く、そこを植物の自然構成を生かして床やバスタブ、ベッドなどが構成されていれば上位選出は間違いなかったのが心のこりであった。

設計競技審査委員会

委員　　小西　彦仁

【奨励賞③】

「作品名」 Peekaboo！ House 「作者」佐藤　択音



＜講　評＞

Peekaboo!（いないないばー）の少しお茶目でかわらしい様子を住宅計画に持ち込みデザインされている。

街に生活が見え隠れさせるための開口部により少し内部を見せたり、あるいは内部空間が垂れ下がりピロティにはみ出したりする視覚的操作などが行われ、その行為がコミュニティを創出すると説いている。

一方空間内部でも家族が見え隠れする場所をつくり緩やかに繋ぐことにより心地よい居場所をつくり出している。

この住宅を構成する様々なエレメントは内外に作用しながら良好な効果を生み出しており優れた計画である。

外部デザインにおいては1980年代のポストモダンを彷彿し懐かしくも感じたが現代においてはプレポストモダンが新鮮なのかもしれない。

設計競技審査委員会

委員　　小西　彦仁

【奨励賞④】

「作品名」 －　ふと、暮らしが見える　－　　「作者」佐々木　絢斗



＜講　評＞

北国特有の風除室的空間を、生活の中心として扱う提案である。

風除室に置かれた自転車や植物などから、住まい手の個性やライフスタイルが滲み出るという着眼点が面白い。私自身、住宅界隈に見え隠れする「モノ」が持つ、地域と住まいを繋ぐ媒体としての可能性を感じながら設計に取り組んでおり、そこから生まれる「親しみ」が「かわいい」に繋がるという構想には素直に共感できた。

一方で、その着眼点を魅力的な空間として成立させるためには、もう一歩踏み込んだ提案が欲しかった。

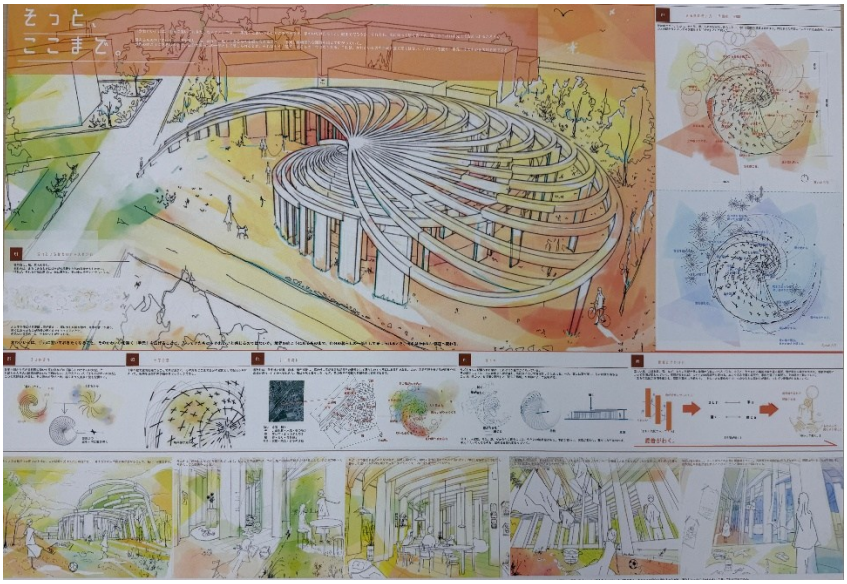
また、ドローイングからも「住まいの中心となる風除室」の豊かさが充分に伝わってこなかった。

空間の掘り下げと、それを伝える図面表現やパース画角の工夫があれば、より高い評価が得られたと思う。

設計競技審査委員会

委員　　赤坂　真一郎

【入選3作品】



【入選①】
「作品名」 そっと、ここまで。
「作者」 工藤　木乃華
　　新井　乃愛



【入選②】
「作品名」 影の咲く家
「作者」 宮本　実久



【入選③】
「作品名」 こらーじゅ
「作者」 濱名　琴音